

# 無標名詞の意味・語用論

— 類表示と個体指示 —

安 武 知 子

## 0. はじめに

英語を含む印欧語をはじめとして、世界の多くの言語には、文法範疇としての単数・複数の別や名詞の可算・不可算の区別が存在している。ところが、日本語にはそれに対応する数の概念がない。日本語を学ぶ外国人の多くが不思議に思うことの一つは、いったい日本人はどのようにして数に関する情報を理解し合うのかということである。

本稿は、この疑問を出発点とした、発話における名詞句の意味・語用論的考察であり、特に検討の対象となるのは無標名詞句 (unmarked noun phrases) の指示機能である。<sup>1</sup> 無標名詞句とは、冠詞、接辞などを伴わず普通名詞 (の原形) だけでなりたっている名詞句のことであり、日本語に特徴的なものと考えられがちであるが、英語の抽象名詞、物質名詞もその一種である。また、数は少なく目立たないが、加算名詞の無標用法は英語などの言語にもふつうにみられる。以下の議論では、発話の中で無標名詞がどう使われ、どんな役目を果たしているかについて考察し、そこに、数の概念を越えた普遍的な役割、すなわち、個体を超越した「類」を表示する機能の存在を認定する。換言すると、本稿では、無標名詞句は本質的に類表示辞 (class designator) であり、発話の場における具体的指示対象の個体としての数は、本来的に、その表現の射程外にあるという事実を論証していく。

## 1. 日本語における数概念の欠如

日本語には無標名詞が頻繁に見られるが、その主な要因は、冠詞の欠如および、文法上の数の欠如にあると考えられる。このうち、冠詞の欠如についてはかなり注目されており、その機能が部分的に助詞によって担われている事実が明らかになりつつある。一方、文法上の数概念の欠如については、あまり研究が進んでいるとは言えない現状にある。

日本語における数表現といったとき、念頭に浮かぶのは、「たち」「ら」「方」といった複数接辞や、「山々」「人々」「国々」などの疊語、また、「枚」「冊」「足」「杯」「軒」「匹」といった数分類辞 (numeral classifier, counter) の存在である。しかし、複数接辞や疊語はごく限られたものにしかな用いられず、また、数分類辞は名詞の分類上の所属を示すだけで、いずれも印欧語の数表示とは異質のものである。<sup>2</sup> 印欧語では数表示は、単に名詞の単複を表すだけではなく、性 (gender) の概念と共に、修飾語と被修飾語、主語と述語を結ぶ役割も有するのに対し、日本語では、一般に単数か複数かによって名詞の文法的扱いが変わるなどということはない。

日本語に文法的カテゴリーとしての数 (また性) がないことについては、従来あまり論じられたことはない。文法書の多くは、この点については全く触れていないか、あるいは「日本語の名詞は性・数によって変化することではなく、複数を表示する手段は二、三あるにはあるが、その用法は限られている」と述べるにとどまっている。<sup>3</sup> 日本語に文法的数 (や性) が何故ないかについて言及した文献はさらに少ない。僅かに、野元 (1978, 14-19) が次のような指摘を行なっている。

- (1) 日本語には、性や数に関しての文法的カテゴリーはありませんが、その代わり敬語という文法的カテゴリーがある、といていいと思います……場面を敬語的環境でとらえて、これを語彙的だけでなくシタタクスの表現し分けるのですから、これを文法的カテゴリーと認めていいと思います……結局どうも日本語の複数は、単数がただ雑然と集まっているだけのようで、その間に質の違い、といったようなもの

はないようです。その雑然としたものの中から一つだけ抜き出すのにはなにも特別な手続きいらないのであって、個性を捨象した集合の中から一つの個を引き抜いてくる西欧語のように、不定冠詞は必要でなかった、とされています。ここにも、日本語に文法的カテゴリー「すら」が出てこなかった理由の一つがありそうです。

敬語が文法的カテゴリーであるかどうかについては別の機会に論じるとしてここでは議論しない。また、野元の指摘するもう一つの理由すなわち、日本語と西欧語の個と集合の概念の違いというのは十分な経験的裏付けが与えられておらず、このままでは説得力に欠けるといわざるを得ない。以下の議論では、別の観点からこの理由説明が求められていくことになる。

## 2. 英語の無標名詞

次の(2)と(3)とを比べてみよう。

- (2) a. a stream of *cars*  
b. the scent of *roses*
- (3) a. 車の流れ  
b. 薔薇のかおり

(2)の英語の表現には *cars*, *roses* という形で指示対象の数が複数であることが明示されているが、(3)の日本語の表現からは指示対象の数に関する情報は欠落している。このような事実が日本語の表現力の乏しさを示すものであるかどうかについては第4節以降の議論で明らかにしていくことにして、ここではまず数表示の欠如が日本語の専売特許ではないという事実注目したい。

世界の言語を調べてみると、日本語のような無標名詞を持つ言語は数多く存在しており、英語も例外ではない。日本語ではそれが圧倒的に多く、英語においては比較的数量が少ないという違いがあるだけである。英語の場合は無標の名詞といったら、まず *power*, *music*, *knowledge*, *rice*, *water*, *wine* などの不可算名詞のグループがある。英語の不可算名詞はい

いわゆる抽象名詞 (power, music, knowledge, etc.) と物質名詞 (rice, water, wine, etc.) とに大別できるが、全体として一つの文法上のカテゴリーをなしており、その基となっているのは、意味的な個性性 (individuality) の欠如である。すなわち、このタイプの名詞によって言及されるものは個を認定して、他から切り離して取り出したり、部分集合をつくることができないため、不定冠詞や複数語尾をとらないという考え方である。<sup>4</sup>

英語の不可算名詞が文法上のカテゴリーを成しているといっても、不可算名詞が可算名詞として扱われたり、可算名詞が不可算名詞と同じように無標で用いられたり、といった多様性は広範に認められる。よく知られているように、school, church など通常は数えられる名詞の類に入るが無冠詞でも用いられる。

- (4) a. John went to *school*.
- b. They were at *church*.

これらは建物そのものでなく、その中で行われる本来的行為、プロトタイプの行為などを示す用法であると説明される。これに類する無標名詞の用法は、少数の例外的なものに限られているわけではないが、従来あまり注目されることはなかった。数例を挙げてみると、次の (5), (6) は、Allan (1980 : 565), Mufwene (1981 : 227) の、また (7) は Klein (1976 : 415) の指摘している例である。

- (5) a. Hetty likes to gorge herself on *cake*. [MASS]
- b. Whenever Hetty gobbles down on *a cake* [COUNT] her diet starts tomorrow.
- (6) a. Nick Frenzy plays *guitar* [MASS] with Noise.
- b. Carol has just bought *a guitar* [COUNT].
- (7) a. He got *egg* on his necktie.
- b. He ordered *an egg* over easy.

実際に、談話やテキストを眺めてみると (5a), (6a), (7a) に類する例は

存外に多いことがわかる。<sup>5</sup>

- (8) a. I will be in *trouble*.
- b. Man is *mortal*.
- c. I took *train* to Boston.
- d. They escaped from *prison*.
- e. He took her to *court*.

さらに, at *night*, by *train*, *husband* and *wife*, at *table*, *side* by *side* に類する, しばしば成句 (set phrase) ・凍結形表現 (frozen expression) と称される表現の中には無標名詞は数知れない。これらは意味・語用論的には上記の (5a), (6a), (7a), (8) にみられるものと同じ資格を持つと考えられる。それがどのようなものであるかについての議論は次節以降でくわしく論じることにするが, 基本的には次のような複合名詞の第一要素とおなじ資格であると考ええる。

- (9) *bug spray*, *party-loving youngsters*, *dish washer*, *picture album*, *book worm*, *car maker*<sup>6</sup>

これらの事実は可算・不可算の区別が英語における重要な文法上の概念であることを否定するものではない。ただ, 名詞をそれ自体として, 可算名詞と不可算名詞とに大別するやりかたには問題が残ることを示すものである。実際, 辞書の記述をみると, ほとんどの名詞のエントリーに可算・不可算の両用法が記載されているのがみられる(たとえば, *paper*, *glass*, *day* など)。この点に関して, Allan (1980) は次のような観察・主張を行なっている。

- (10) a. ほとんどの名詞が可算名詞としても, 不可算名詞としても用いられる。+/-count というのが名詞の内在的性質とは考えられない。(p. 565)
- b. 数えられるか否かは名詞自体のもつ性質ではない。名詞句の性質である。言い替えると, シンタグマの中での名詞に伴う性質であり, 語彙項目エントリーとしての名詞と結び付いているもので

はない。(p. 546)

本稿の立場は、Allan の主張を支持し、特に、辞書の記述上では可算性をもつと認定される語義においても無標用法が存在するという事実を重視し、英語における名詞句の無標用法が可算・不可算の別を越えてみられることの説明を求めるものである。

### 3. 他言語における無標名詞

日本語・英語以外にも可算名詞の無標用法は存在している。たとえば、スペイン語では次の (11a), (12a) のような叙述名詞および (11b) のような所持表現の例があげられる (Klein 1976 : 413, 420)。

- (11) a. Juan es *medico*.  
Lit. \* 'John is doctor'  
= 'John is a doctor'
- b. Tengo *pasaporte frances*  
Lit. \* 'I have French passport'  
= 'I have a French passport'
- (12) a. Ese hombre parece *policia*.  
'That man seems to be a policeman'
- b. Ese hombre parece *un policia*.  
'That man looks like a policeman'

同様に、ギリシャ語にも次例 (13a) のような無標名詞用法が存在する (Pentheroudakis 1977, cited in Harlig 1986)。

- (13) a. Phoraei *skoupho*.  
he-wears cap  
'He is wearing a cap'
- b. # Phoraei *skoupho sto podi tou*.<sup>7</sup>  
on-the foot his  
'He is wearing a cap on his foot.'

また、ルーマニア語にも（職業を表す場合に限ってであるが）次のようなゼロ冠詞と不定冠詞の対立が認められる（Farkas 1982 : 109）。

- (14) a. Ion e *medic*.  
Ion is doctor  
‘Ion is a doctor’  
b. Ion e *un medic*.

a

‘Ion is [nothing less than] a doctor’

印欧語以外にも、同種の現象がみられる。たとえば、ハンガリー語では次のような表現が観察される。（Farkas 1982, Harlig 1986）。

- (15) a. A fiam *orvos*.  
the son-my doctor  
‘My son is a doctor’  
b. A fiam *egy orvos*.

a

‘My son is [nothing less than] a doctor’

- (16) a. A fiam *szemetes*.  
garbageman  
‘My son is a garbageman’  
b. A fiam *egy szemetes*.  
‘My son is a [lowly] garbageman’

さらに、「不定冠詞」*bir*を有するといわれているトルコ語にも無標名詞表現は存在する（Nilsson 1985 : 122, 128）。

- (17) a. *Öğretmen* olarak çalışacağım.  
teacher as I-will-work  
‘I will work as a teacher’  
b. O büyük evin arkasında *bahçe* var.  
that big house-Gen. back-3sg-poss-Loc. garden existent

‘Behind that big house there is a garden’

ここで観察した言語の数はけっして多いわけではなく、世界のすべての言語の代表であるとはいえないが、少なくともこれだけの系統を異にする言語に同じような現象がみられるのは注目値する。具体的に本節で扱った例の大部分はゼロ冠詞と不定冠詞（これらの言語においては数詞の「一」と同形 (homomorphous)）との対立という図式に当てはめることができる。Harlig (1986) はこの点に焦点を当て、英語の a(n)/one の対立とも共通する語用論的区別の存在を認定している。一言でいうならば、数種の構文において観察される不定限定詞の二つのタイプ (a(n),  $\emptyset$  と ‘one’) の形態論・統語論的対立が示すものは、無標対有標の対立である。<sup>8</sup> すなわち、非数詞の限定表現 (a(n),  $\emptyset$ ) は語用論的に無標であるが、数詞は有標であり、さまざまなタイプの情想 (affective meaning) や含意 (implicature) を含み、話し手聞き手の信念に訴えるニュアンスを醸し出す。

Harlig は、英語におけるゼロ冠詞表現には言及しておらず、また、扱っているのが、ある種の他動詞の目的語と叙述名詞に限られているため、その主張がここで問題にしている無標名詞表現全体にあてはまるわけではない。次節以降では、日本語、英語を含め、これまで扱ってきたすべての言語の無標名詞表現に共通する本質的機能、普遍的性質を究明していくことにする。

#### 4. 具体的指示と一般的指示

無標名詞の普遍的性質の探求は、日本語の名詞表現一般の意味的・語用論的性質の解明につながる。まず、次の例を検討してみよう。

(18) わたしは林檎を食べた。

この日本語は、文字通りに英語に翻訳しようとしても簡単にはいかない。どこが難しいかといえば「林檎」を単数にするのか複数にするのか、はたまた、定冠詞をつけるべきか、不定冠詞をつけるべきかというようなところが、場面の脈絡なしには決定不可能な点である。それでは、この文はあ



いまいかといえ、けっしてそうではなく、日本文としてはそれ自体で充足した表現なのである。本論のテーマにおいては、実はこのところに、問題の鍵が隠されているのである。(18)の文は、語用論の観点からは、「食べたくだもの種類」について述べている文であると考えるのが正しい解釈のしかたである。実際に食べた林檎の数が単数だったか複数だったかは発話の意図とは関連がない (irrelevant) と考えられる。この点では日本語は Grice (1967) の関連性の格率 (Maxim of Relevance) に従っている。もちろんコンテキストが与えられれば、たとえば、テーブルの上の一つずつ並べられていた果物のうち食べたのが林檎だったというのであれば、

(19) I ate *the* apple.

と英語の定名詞句にも対応させることもできるし、各種のくだものが複数あったときには、

(20) I ate *an* apple.

の意味にもなる。さらに、小さく切って、皿に並べられている一切れあるいは数切れを食べたという状況を描写するのにも有効である。

(21) I ate *a piece/pieces of an* apple.

日本語の無標名詞は特定の個に言及しているというよりも、その言葉によって指し示されるカテゴリーに言及している。実際の指示対象の数がいくつであったかは語用論的に社会的、文化的考慮によって決定されるのである。したがって、(18)の「林檎」という表現は、「林檎」という類 (class)一般を指しているのであって、それ自体としては具体的な指示対象 (particular referent) をもたないのであるから、(19)-(21)のどれをとってみても意味論的・語用論的に正確な(18)の翻訳ではないということになる。かといって、英語ではこの場合無標名詞表現は用いることはできない。(22)は非文である。

(22) \* I ate *apple*.

あえて日本文に近い表現を捜すとすると第2節で触れた複合名詞表現になる。

(23) ?I did *apple-eating*.

次に(24)の例を考察してみると、英語の方も不可算名詞であり無標表現であるため、ここは日本語と英文の表現がピッタリ一致している。

(24) a. トムは音楽が好きだ。

b. Tom likes *music*.

(24a), (24b)のいずれも具体的指示物をもたず、一般的に音楽というものに言及した表現である。

以上の観察から次のような仮説を立てることができる。

(25) 無標名詞の意味的特徴は対象の個体認定の欠如 (non-individuation) と類表示機能 (class-designating function) である。

類表示機能とは、いってみれば、特定の個を超越した抽象的な「類」を表示する機能である。特定の時、特定の場所において特定の個体が存在する場面での発話であっても、無標名詞それ自体には抽象的、観念的な類表示機能しかない。この仮説は日本語だけにあてはまるものではなく、普遍性をもつ。

この仮説に立つと、多くの疑問が永解することになる。第一に、なぜ、日本語は文法的な単数・複数の表示がないのかという疑問に対して次のような説明が得られる。

(26) 日本語の名詞は、一般に、無標で用いられ、類指示辞(class designator) として機能するため、具体的な個体あるいは集合体を指し示さず、「数」は問題にならない。

ここで、もう一度(2), (3)の例をみてみよう。

(2) a. a stream of *cars*

b. the scent of *roses*

(3) a. 車の流れ

b. 薔薇のかおり

一見すると、英語も日本語も観念的に「車」「薔薇」に言及しているように思われるが、このような場合にも、英語では複数接辞が存在し個体が認

定されており、日本語ではあくまでも類が表示されている。

英語は、一般に、個体を認定してそれに具体的に言及するときには、数の単複の区別を明確に表示し、そのうえさらに、指示の定・不定についても明示する。日本語では、特定の指示対象に言及するときは指示代名詞 (demonstrative pronoun) や助詞の選択によって行ない、数については、特に必要なときは別として特に表さない。文脈の中で数を決定するという考え方にたてば、動詞とか、副詞とかで数が自ずから決まる場合も多い。大部分の場合、語用論的に数の扱いが決まるのである。

(27) a. Quick, bring me some stones!

b. 大急ぎで石ころをとっておいで。

このような場合、聞き手は自分がとってくるよう要請されている「石ころ」の数については常識で判断せざるをえない。英語の方は少なくとも複数であるということまでは情報が与えられているが、日本語では単数か複数かもわからない。くわしく知りたいときには、「いくつ」と聞き返すことがいつでも可能であるが、このような場合の表現力では英語の方が勝つといえるのかもしれない。

実際に、単複の区別をもつ言語からの翻訳では、多くの場合、日本語版からは数に関する情報が落ちてしまっているのが事実である。しかし、それも他の手段によって伝えることができる場合が多いはずである。たとえば、次のような例をみてみよう。

(28) a. 羽が散らかるとき

b. When *the feathers* fly out

(29) a. 手の平, 耳

b. palms, ears

(30) a. この池には亀がいる。

b. 大きな林檎の木があつて鈴なりに実がなっています。

(28)は動詞「散らかる」に固有の意味から主語がかなり多量のものであることがわかる、いわば、コンテキストが数に関する情報を提供している例

である。(29)は名詞自体の語義から、無標の場合、対象物が二つずつであることが了解される例である。(30)に挙げたのは言語外の情報で数が決まる存在表現の例である。このような場合の数の決定は、コンテキスト、描写のタイプ、馴染みの程度によると考えられる。たとえば、(30a)の亀の数は、一匹のこともあり得るが、複数がイメージされることの方が多い。この池は亀の棲む池であるという意味で、池の特徴づけをしているとする解釈がふつうである。一方、(30b)の方は木の数は一本である。それは「大きな」という形容詞の存在に依存しているようである。実の数は「鈴なりに」という副詞によって、その量が示されている。

名詞を単に逐語訳的に翻訳していたのではこのような情報は伝えられない。また、ここでは、論じる余裕はないが、助詞の使い分けによって、指示を特定したり、数を表示したりという機能が担われる。見方を変えるならば、英語の方が、話者の意味するところとは直接関係ないところまで、区別しなければならないという無駄をしている場合もある。数学などでは、単復の区別は、全く意味のないものであり、かえって数学的な純粋な指向にはマイナスでもありうる。

ここで、英語と日本語のどちらがより論理的であるかということが問題になるかもしれない。「わたしは林檎を食べた」という表現は英文法の論理からすればあいまいであろうが、語用論的には極めて正確な文である。一方、皿に山盛りになった八切りの林檎を何切れか食べた場合、I ate pieces of an apple という英文は正確でないことがありえる。八切りの林檎を9片以上食べた場合などがあるからである。この点では、英語の数概念は表現上の足かせとなりうる。

前節まで検討してきた、英語やその他の言語における無標名詞表現にも、日本語の場合と同じような説明が当てはまる。すなわち、これらの言語における無標名詞もみな具体的指示対象をもたず、類表示機能のみを有するのである。このことは裏を返せば、冠詞や数表示が指示対象の存在や語用論的重要性を強調する働きをしていることを示すものである。

英語の場合に、take train は言えても、\*take apple とは言えないのはなぜかという問題が残る。ここには名詞によって言及された事物の現実世界におけるクラスがかかわっている。列車で旅行するというのは旅行の一形態として、社会的、慣習的に確立した行為をなしているのに対し、林檎を取るというのは英語の社会の中で特別な慣習的行為ではないからということになる。したがって、trainはtakeの目的語の位置で類表示辞(class designator)として用いられ得るが、apple にはそのような用法がない。

## 5. 無標名詞と抽象表現

日本語には抽象名詞が少なく、抽象的な概念を表すとなると漢語の熟語に頼らざるをえないとはよくいわれていることである。しかし、具体名詞を類表示辞として用いることは多い。それは、一般的にいえば、具体名詞の抽象的用法といってもよく、日本語に特徴的なものといえよう。(英語には部分的にはあるが、poem/poetry のような具体名詞と抽象名詞のペアが存在している。)日本語では、言ってみれば、具体的なものの中に一般的なものをみるという思考法が広く行われているということであるのかも知れない。一事は万事に通ずるという考え方である。

(31) a. I don't like dogs.

b. 犬は嫌いだ。

(32) a. I don't like that dog.

b. あの犬は嫌いだ。

(31b)の無標の名詞句は一般論を述べている。(32b)のように具体的に指すものがあるときにはそれなりの表示がつく。

抽象的思考の強いサンスクリット語では、利・害・得・失・生・死・苦・楽といった抽象名詞があたかも実体的なものであるかのように普通の言葉として使われるというので、よく日本語に抽象名詞が少ないという議論の引合いに出される。本稿での考察に基づいて考えると、ちょうどこの逆のことがいえるのではないかと考えられる。すなわち、机・花・猫などの

具体名詞があたかも抽象的なものであるかのように、普通の会話の中で具体と一般とが未分化の状態 で用いられるというわけである。それは、大野(1978)の論じている、「物を純粹に客觀的にみて、自分自身と切り離して対象化して扱うのではなくどこかで自分自身の情意や感覚と対象を融合させ、重ねあわせ、未分化のまま で言語化していく」という、日本語表現の特色に通じるものであろう。しかし単複の区別がないことは、日本人に個と一般の区別がわからないということではなく、両者の形式的区別の必要を認めないためであると考えられる。

## 6. まとめ

以上、無標名詞の類表示辞としての機能について主に日本語と英語を中心に考察してきた。日本語における数概念の欠如の問題については、次のような結論が得られたことになる。すなわち、日本語の名詞の本来的機能はカテゴリーの表示であるため、そのようなシステムにおいては「数」は本質的に問題にならないのである。

このような日本語のシステムに対して、印欧語の場合は、話者の意図や話の本筋にはおかまいなく、数について具体的に述べざるをえないような構造になっている。単複の区別が数学的にはほとんど意味がないことと考えあわせると、文法的数はあまり合理的ともいえないようである。その点、日本語では対象物の具体的な数がそこでの記述にとって関連があるときにのみ明示的に表記するというシステムになっており、Griceの「量の格率」「関連性の格率」にも合致した、独自の合理的数表記法を有していることになる。

### 注

1. ここでは、おもに日本語を扱っている関係上、名詞、名詞表現、名詞句という用語を厳密な定義なしに用いている。
2. 複数接辞は、ときに「犬たち」「蠅ども」などのようにも用いるが、人間について用いられるのが主体であり、無生物につくことはない。また、橋本

(1978:6-7) が指摘するように「おじさんたちは、いつも四時ごろやってきます」というときは、複数のおじさんであることもあるが、ふつうは、おじさんとその家族や友人のことである。

3. cf. C. J. Dunn and S. Yanada. 1958. *Japanese: A Complete Course for Beginners*. London: Hodder and Stoughton, p. 7.
4. 不定冠詞が常に不可算名詞と合いいれないわけではない。フランス語やバントゥー語では独自の冠詞や類接頭辞 (class prefix) がつく。
5. 新聞等の事件見出しには次のようなゼロ冠詞表現が多用される。ただしこの場合には数表示の方は失われることはない。
  - a. Car lynched on 10th Street
  - b. Japanese statesman visit campus
  - c. Biologist discovers new antibiotics
  - d. Cheerleaders are annoying resident
  - e. University groups battle energy waste
6. これらの例は Mufwene (1981: 232) からの借用である。
7. # 記号は語用論的に不適格な表現であることを示す。
8. ここでいう無標の意味は、本稿でいう無標名詞の無標とは異なり、対立する言語的単位において、単純で一般的特徴をもつ方という意味であり、有標とは、複雑で一般的でない特徴をもつ方という意味である。

#### REFERENCES

- Allan, K. 1980. Nouns and countability. *Language* 56. 541-67.
- Carlson, G. 1977. *Reference to kinds in English*. University of Massachusetts. Ph. D. diss.
- Corbett, G. and R. Hayward. 1987. Gender and number in Bayso. *Lingua* 73. 1-28.
- Elliott, M. 1981. *Grammatical number*. City University of New York. Ph. D. diss.
- Farkas, D. 1982. *Intensionality and Romance subjunctive relatives*. University of Chicago. Ph. D. diss.
- Grice, H. 1967. Logic and conversation. *Syntax and semantics*, vol. 3: *Speech acts*. P. Cole and J. Morgan eds. 1975. New York: Academic Press.
- Harlig, J. 1986. One little word that does so much. *CLS* 22. Part2. 91-104.
- 橋本萬太郎 1978. 「性と数の本質」『言語』vol. 7. no. 6. 2-12.

- Hinds, J. 1986. *Situation vs. person focus*. Tokyo: Kuroshio Shuppan.
- Jespersen, O. 1965. *The philosophy of grammar*. New York: W. W. Norton and Co., Inc.
- Klein, F. 1976. "Same" vs. "different" crosslinguistically: The "articles" in English and Spanish. *CLS* 12. 413-24.
- Kuno, S. 1987. *Functional syntax: anaphora, discourse and empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- McCawley, J. 1968. The role of semantics in a grammar. *Universals in linguistic theory*, E. Bach and R. Harms, eds. New York: Holt Rinehart and Winston, Inc.
- McCawley, J. 1979. *Adverbs, vowels and other objects of wonder*. Chicago: University of Chicago Press.
- 三上章 1972. 『現代語法新説』東京: くろしお出版。
- Moravcsik, E. 1978. Agreement, *Universals of Human Language*, vol. VI, J. Greenberg, ed. Stanford: Stanford University Press.
- Mufwene, S. 1981. Non-individuation and the count/mass distinction. *CLS* 17. 221-238.
- Nilsson, B. 1985. Case marking semantics in Turkish. University of Stockholm. Ph. D. diss.
- 野元菊雄 1978. 「日本語の性と数」『言語』vol. 7 no. 6. 14-19.
- 大野晋 1978. 『日本語の文法を考える』東京: 岩波書店。
- 奥野浩子 1980. 「定冠詞, 不定冠詞のいわゆる「総称的用法」について」『英語学』22号. 101-112. 東京: 開拓社。
- Pelletier, P. ed. 1979. *Mass Terms: Some Philosophical Problems*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Co.
- Quine, W. 1960. *Word and object*. Cambridge: MIT Press.